

〔論 文〕

# 遠州方言の「ら抜き言葉」

## ——遠州地方の教員と生徒に対する調査から——

中 山 恵 利 子

### 1. はじめに一本稿の背景

松下大三郎が1897年(明治30年)発表の『遠江文典』に書き記しているように、遠江(静岡県西部地方。大井川以西とされる。以下、遠州地方とする)においては「ら抜き言葉」は方言(地元では遠州弁と言うので調査では遠州弁を使ったが、本稿では遠州方言とする)とされている。

可能法をつくるには、第二変化にエルを附することあるは東京にひとしけれど、之をイルとなまることあるは異なり。四段は下一段として、飛ベル、書ケルなどいふは、東京にひとしけれど、東京の如く、レルを附して、飛バレル、書カレル、などとはいはず。受動と混ずればなり。又、東京にて四段以外にはラレルを附して、逃ゲラレル、受ケラレルなどいへど、遠江にては斯くいふときは受動と混ずることあり。ラレルをつめてレルといふ、逃ゲラレル、受ケラレル、を逃ゲレル、受ケレル、といふなり。

松下(1987)は、遠州地方では四段活用動詞(現在の五段活用動詞)の可能動詞「書ける」は東京と一緒に、可能形「書かれる」は「顔に墨で×を書かれた」のように受身と混同するから使わない。また、一段活用動詞やカ行変格活用動詞(以下、カ変活用動詞とする)の可能形「逃げられる」というと、例えば「泥棒に逃げられた」のように受身と混同するので、可能の意味で使う場合は「この刑務所は監視が甘いので、うまく逃げれるだろう」と「逃げれる」にする。助動詞「れる・られる」を可能の意味で使わない点が東京と異なる、と述べている(例文は筆者作成)。つまり、遠州地方では、明治時代の文献にすでに受身と区別するために、一段活用動詞やカ変活用動詞の可能形として「ら抜き言葉」が使われている、という記述があるのである。

「ら抜き言葉」は、学校文法では正しくないとされているが、五段活用動詞が数百年かけて可能動詞化(「書かれる」から「書ける」へ)したのと同様に、一段活用・カ変活用動詞の可能動詞化として発生したという説を述べる研究者は少なくない。助動詞「れる・られる」には可能のほかには受身・尊敬・自発と4つの意味を負わせているので、そこから可能の意味を持つものを独立させることは合理的な流れだというのである。例えば、井上(1998)は、可能動詞化は「意味の明晰化」「文法の単純化」が理由であり、「千年に及ぶ日本語動詞の簡略化の一部(p.29)」とする。

『平成27年度 国語に関する世論調査』(有効回答数1,959人。以下、世論調査という)には「ら抜き言葉」の使用実態に関する全国的な調査の結果が掲載されている。それを見ると、「ら抜き言葉」の「見れる(48.4%)」「出れる(45.1%)」を使う人が「見られる(44.6%)」「出られる(44.3%)」を使う人を上回ったことが分かる(以下、「見られる」のような、学校文法で教える言葉を「ら入り言葉」とする)。全国的にも「ら抜き言葉」を使う人は増えてきており、一段活用・カ変活用動詞の可能動詞化が進んでいると言われていることが現実味を帯びてきているようだ。

しかしながら、世論調査においては2語の使用率がほんの少し上回っただけのことであるので、文部科学省は1995年に国語審議会が出した「国語審議会としては、本来の言い方や変化の事実を示し、共通語においては改まった場での「ら抜き言葉」の使用は現時点では認知しかねるとすべきであろう」という審議経過報告を現在も踏襲しており、学校文法において「ら抜き言葉」は誤用とされたままである<sup>1)</sup>。

「ら抜き言葉」が方言とされてきた遠州地方では、「ら抜き言葉」について教員はどのように教えているのだろうか。また、自分たちが日常使っている言葉が文法的に間違いとされることに対して、生徒はどのように受け止めているのだろうか。さらに、文部科学省は方言教育を展開しているが、遠州地方の教育現場では「ら抜き言葉」を方言として取り上げているのだろうか。それ以前に、そもそも「ら抜き言葉」は今もなお遠州方言なのか、今も遠州方言だとして、遠州地方の人々は「ら抜き言葉」を遠州方言だと認識しているのであるか、というような素朴な疑問が本稿執筆のきっかけである。

文法教育で助動詞の活用を教えるのは中学校である。また、方言教育は小学校からも行われるが、中学校でも「方言と共通語」という単元で取り上げられている。そこで、本稿では遠州地方の中学校の国語教員への質的調査と、中学生への量的調査を通して、以下の3点を明らかにする。

1. 「ら抜き言葉」は遠州地方の中学校国語教員と中学生にどの程度使われているか。

現在でも遠州地方の方言と言えるのか。

2. 「ら抜き言葉」は遠州地方の中学校国語教員と中学生に方言として認識されているか。

3. 「ら抜き言葉」は中学校の文法教育と方言教育でどのように教えられているか。

中学生はどのように受け止めているのか。

## 2. 調査の概要

### 2.1 教員調査

中学校の国語教員については、三代さかのぼって遠州地方の出身者（教育学部を有する大学が遠州地方にはないため、対象者は全員が学生時代等数年間を当該地方以外で過ごしている）を対象にしている。世代差や性別差を見るため、20代から60代の各年代男女1名ずつ計10名に、インタビュー（資料1）とアンケート（資料2）を行った。10人のデータを得るために9校の中学校を回った。調査時期は2020年1月と3月である。

#### 資料1 教員インタビューの項目

- ①「ら抜き言葉」を使うか。（※調査者が文を途中まで話し、最後の（ ）に動詞を入れて文を完成させるという方法で答えてもらう。対象者は何も見ずに音声だけで回答する。）  
 今晚は新年会があるもので、見たいテレビが（ ）。  
 彼は羊の肉が苦手だもので、ジンギスカンは（ ）。
- ②「ら抜き言葉」を認識しているか。（「食べれる」のような言葉を何というか。）
- ③「ら抜き言葉」はどのようなものだと考えているか。
- ④「ら抜き言葉」が遠州弁だと知っているか。
- ⑤学校で子供たちに「ら抜き言葉」を使って話すか。どんなときに？
- ⑥子供たちは「ら抜き言葉」を使っているか。注意するか。
- ⑦文法教育で一段動詞やカ変動詞の可能形をどのように教えているか。

- ⑧文法教育で「ら抜き言葉」について説明しているか。  
 ⑨方言教育はどのように行っているか。（「ら抜き言葉」が方言だと知っている人には、方言教育の中で「ら抜き言葉」をどのように教えているか尋ねる。）

## 資料2 教員アンケートの項目

I. ご自身のふだんの感覚でお答えください。（プライベートな場面で使うか）

- A 自分も使う  
 B 自分は使わないが、人が話しているのを聞くのは問題ない  
 C 自分は使わないし、人が話しているのを聞くのもいや  
 D その他
- ①「今年は初日の出が見れた」 A B C D（以下、省略）  
 ②「昨晚はぐっすり寝れましたか」  
 ③「早く出れる？」  
 ④「毎朝6時に起きれる？」  
 ⑤「こんなにたくさんは食べれない」  
 ⑥「あした朝5時に来れますか」  
 ⑦「彼が来るなんて考えれない」  
 ⑧「彼は人の痛みを感じれない人だね」  
 ⑨「ようやく分かれた恋人のことを忘れれるようになった」  
 ⑩「このお金で子供にプレゼントを買ってあげれる」  
 ⑪「あれは彼が仕組んだことだと考えれるんじゃない？」

II. 語により A～D と答えが変わる人へ なぜ語により変わるのだと思いますか。

※①③⑤⑥⑦は『平成27年度 国語に関する世論調査』の調査文と同じである。

※⑦と⑪は「考えれる」だが、肯定形と否定形で違いがあるかどうか調べた。

## 2.2 中学生調査

浜松市の、ある中学校にアンケートを依頼し、2017年12月に複数の国語科教員によって実施された。2.1の教員調査の対象者がいる中学校ではないので、教員調査対象者の教え子というわけではない。調査対象者は以下のとおりである。

表1：中学生調査対象者

学年	1 年生	2 年生	3 年生	計
人数	96	99	99	294

各学年100人弱と人数のバランスはとれている。294人のうち、遠州地方生まれは222人、222人のうち遠州地方育ちは195人、195人のうち両親ともに遠州地方出身者である生徒は107人である。107人と294人との結果に特筆すべき差は見られなかった。方言は小学校5年生と中学校2年生で学ぶ。可能形を習

うのは中学校2年生の3学期である。今回の調査は12月に実施したので、1、2年生は未習で、3年生のみが既習となる。質問によっては3年生の結果を取り出して表にまとめた。

資料3 中学生アンケートの項目

I. あなたはふだんAとBのどちらを使いますか。①～④の中から選び、○をつけてください。④を選んだ人は、どうして「その他」を選んだのか書いてください。

(1)用事があって「見ることができない」という意味で…

A 今晚の番組は見られないよ。

B 今晚の番組は見れない。

①Aだけを使う ②Bだけを使う

③AもBも使う ④その他( ) ※以下①～④は省略

(2)「寝ることができた」という意味で…

A ぐっすり寝られた？

B ぐっすり寝れた？

(3)「起きることができる」という意味で…

A 朝6時に起きられる。

B 朝6時に起きれる。

(4)「食べることができない」という意味で…

A 納豆は食べられない。

B 納豆は食べれない。

(5)あの人は冷たい人なので他の人の悲しみを「感じる事ができない」という意味で…

A あの人は人の悲しみを感じられない人だ。

B あの人は人の悲しみを感ぜれない人だ。

(6)「考えることができる」という意味で…

A これが一番いいと考えられる。

B これが一番いいと考えれる。

(7)「忘れることができない」という意味で…

A 別れた友達のことを忘れられない。

B 別れた友達のことを忘れれない。

II. I (1)「見る事ができない」という意味の「見られない」と「見れない」について質問します。

2-1 「①A (見られない) だけを使う」と回答した人へ

なぜAだけを使うのか、教えてください。

また、Bの言い方については、どのように感じますか。

2-2 「②B (見れない) だけを使う」と回答した人へ

なぜAの言い方を使わないのか、教えてください。

また、Aの言い方については、どのように感じますか。

2-3 「③A (見られない) もB (見れない) も使う」と回答した人へ

どのようなときにAを使い、どのようなときにBを使いますか。

Ⅲ. 国語の授業では「見ることができる」という意味を表す言い方はどのように習いましたか。

- ① 見られる      ② 見れる      ③ ①でも②でもどちらでもいい  
④ 覚えていない      ⑤ 教わっていない      ⑥ その他 (                      )

IV. あなたは、ふだん自分が方言（遠州弁）を使っていると思いますか。

- ① 思う      ② 思わない      ③ わからない      ④ その他 (                      )

①「思う」②「思わない」と答えた人は、どうしてそう思う／思わないのか、書いてください。

V. あなたは、「見れる」「食べれる」はどんな言葉だと思いますか。

- ① 標準語      ② 方言(遠州弁)      ③ 若者言葉      ④ わからない  
⑤ その他( )

②「方言（遠州弁）」と答えた人は、どうしてそう思う（誰かから聞いた等）のか、教えてください。

## VI. あなたについて

- ・何歳ですか。 ( ) 歳
- ・出生地はどこですか。①静岡県浜松市 ②その他 ( ) 都道府県と市町村名
- ・浜松には何年住んでいますか。 ①生まれたときからずっと ② ( ) 年
- ・上の質問で、②と答えた人へ  
浜松に来る前はどこに住んでいましたか。住んでいた場所をすべて教えてください。
- ・お父さん、お母さんは浜松の方ですか。
- お父さん ①浜松出身 ②その他 ( )
- お母さん ①浜松出身 ②その他 ( )

### 3. 調査の結果

### 3.1 「ら抜き言葉」の使用率

### 3.1.1 教員の結果

(1) プライベートな場面における使用率

教員調査は先にインタビューを行い、そのあとでアンケートに回答してもらった。インタビューの冒頭で、筆者が遠州方言で文の途中まで話し、最後に動詞を加えて文を完成させてもらう、ということをした(資料1)。これは音声だけで行い、文字は見せていない。まずは、この結果を紹介しよう。文は以下の2つである。

- ① 今晩は新年会があるもので、見たいテレビが( )。
- ② 彼は羊の肉が苦手だもので、ジンギスカンは( )。

可能形でなくても回答できるので、可能形が出てくるのに少し時間がかかる人もいたが、①は「見れんよお」「見れんら」、②は「食べれんと思うよ」「食べれんね」等、全員が「ら抜き言葉」で回答した。プライ

ベートな会話では「ら抜き言葉」を使用していることが分かる。

その後、「ら抜き言葉」を用いた11の文を並べたアンケートを実施した(資料2)。それぞれの文における「ら抜き言葉」を自分も使うかどうか等、A～Dの4段階で回答してもらった結果を表2-1にまとめる。プライベートな場面で自分が使うかどうかを判断するために、必要な場合は例文を普段話している方言に直して考えてもらった。

表2-1：中学校国語教員10人のプライベートにおける使用率

A 自分も使う B 自分は使わないが人の使用は許容 C 違和感・不快 D その他

	A	B	C	D	世論 ら抜き	世論 ら入り
①見れる	10 (100.0)	0	0	0	48.4	44.6
②寝れる	10 (100.0)	0	0	0	—	—
③出れる	10 (100.0)	0	0	0	45.1	44.3
④起きれる	10 (100.0)	0	0	0	—	—
⑤食べれない	10 (100.0)	0	0	0	32.0	60.8
⑥来れる	10 (100.0)	0	0	0	44.1	45.4
⑦考えれない	8 ( 80.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	0	7.8※	88.6※
⑧感じれない	6 ( 60.0)	1 (10.0)	3 (30.0)	0	—	—
⑨忘れれる	4 ( 40.0)	3 (30.0)	3 (30.0)	0	—	—
⑩買ってあげれる	9 ( 90.0)	1 (10.0)	0	0	—	—
⑪考えれる	8 ( 80.0)	2 (20.0)	0	0	7.8※	88.6※

※右2列の世論調査の「考えれない」と「考えれる」の結果は同一。

表2-1の右2列に、文化庁が実施した『平成27年度 国語に関する世論調査(「世論調査」)』の結果を入れた(「ら抜き言葉」を使う人の率と「ら入り言葉」を使う人の率)が、規模や調査方法を考慮せずに比較すると、遠州地方の中学校国語教員の「ら抜き言葉」の使用率は際立って多いことが分かる。これは学校というオフィシャルな場ではなく、プライベートにおける個人の使用実態として調査したことを改めて記しておく。

「見れる」「寝れる」「出れる」「起きれる」「食べれる」「来れる」は全員が使うという結果になった。インタビュー調査では「授業では「ら抜き言葉」は使わないようにしている」という教員も半数いるが、プライベートでは使っている。全国的な使用率の平均は高いものでも5割に届かない、という言葉を使うことに抵抗はないようだ。

「買ってあげれる」は9割、「考えれる」は肯定形「考えれる」も否定形「考えれない」も8割であり、肯定形か否定形かによる差は見られなかった。「買ってあげれる」を自分は使わないとした人(30代女性教員)は普段は「買ってやる」を使い、「買ってあげる」は使わないということであって、「ら抜き言葉」以前の問題であった(この地方では「あげる」を「くれてやる」というので、「あげる」を使わないというのはその影響があるのかもしれない)。「考えれる」「考えれない」については、世論調査の結果が1割未満であることを考えると遠州地方の人は違和感なく使っている人が多いと言えよう。「考えれない」に違和感を感じるのは1人(40代女性教員)だけである。「考えれない」は違和感があるが、「考えれる」は自分は使わないが許容はできるそうだ。なぜ否定形に違和感があるのかは本人にもわからないということである。「考えれる」を使わない理由は2つあるという。1つは「考えられる」という言葉は受身や尊敬と迷わないので、「ら」を抜かす必要がないという理由である。もう1つは、意味が混同しない言葉については、



国語教員になって「ら抜き言葉」はダメという意識から「ら」を入れようと心がけた結果、プライベートでも「ら入り言葉」を話すようになったからだと言う。

「感じれない」も6割の人が使う。違和感があるとする3人の意見は、先述の、「意味が混同しない言葉については「ら入り言葉」に直した」という40代女性教員、「感じる」を可能形にして使うことがない(30代男性教員)」「感じられない」のほうが不可能な意味が伝わりやすいように思える(40代男性教員)」ということである。30代と40代の男性教員は、その理由は説明できず、感覚的なものようだった。

最も使う人が少ないのは「忘れれる」の4割であり、ようやく5割を切る。しかし、「自分も使う」「自分は使わないが、人が使うのを聞くのは問題ない」を合わせると7割の人に受け入れられている。「忘れれる」に違和感を抱くのは3人である。1人は先述の40代女性教員である。40代男性教員は「忘れれるようになった」だと「忘れるようになった」という意味で伝わってしまう恐れがあるので、「忘れられるようになった」を使うと説明している。60代男性教員は「れれ」と続くのは耳に快く響かないということであった。「B」にした人の中にも「れれ」の繰り返しがかかるという人もいた。しかし、文法的に正しい形の中にも「今度のオリンピックで金メダルを取れば、思い残すことなく引退できるだろう」というように「れ」が2回続く形は存在する。また、戦前の遠州方言研究本『土のいろ』によれば、遠州方言には「見れる」「食べれる」という「ら抜き言葉」だけではなく、それに「れ」が足され、「見れれる」「食べれれる」という言い方もあるという<sup>2)</sup>。『土のいろ』は遠州地方の浜名郡(現湖西市)出身者が編集兼発行人で、浜松市で出版されている。この点については、磐田市(遠州地方)出身の新聞校閲者が、自分の地元では「見れる」では満足せず、「見れれる」とまで区別する、と記事にしている(毎日新聞夕刊1994年1月31日)。戦前だけでなく戦後も遠州地方にはこの形が残っていることが分かる。これらのことから「れ」が2音続くのはこの地方では特別なことではないはずであるが、アンケート調査だったため視覚的におかしいと感じたのかもしれない。

世論調査の結果が出たときに、「見れる(48.4)」と「出れる(45.1)」が「見られる(44.6)」「出られる(44.3)」を上回ったとニュースになったが、本調査の結果はその比ではない。むしろ2つの調査は質問方法も対象人数も異なるため、安易な比較はできない。世論調査は「ら抜き言葉」と「ら入り言葉」を両方掲載して「どちらを使うか」と聞いており、本調査は「ら抜き言葉」のみを掲載し、これを使うかと聞いている。文法的に正しいとされる「ら入り言葉」が並んでいて、かつ文化庁の調査だと、「正しさ」に引かれた回答になる可能性は高いのかもしれない。しかも調査対象者数が多いほど結果は多様な意見に引っ張られて均される。しかし、それらを考慮したとしても余りあるほどの差異ではないだろうか。たった10人の調査ではあるが、職場では「ら抜き言葉」に対して多少の差こそあれ、注意を払っている教員の、プライベート面における使用実態である。そして、この結果は「ら抜き言葉」が今もなお遠州方言として使われ続けていることの証ではないだろうか。

また、年代や性別による使用率についても表2-2にまとめておこう。

20代男女と50代男性の教員3人はすべてA「自分も使う」であった。20代の2人は考え込むこともなくAを選択していた。次に、50代と60代の女性教員が同じ結果で、「忘れれる」だけがB「自分は使わないが、人が話しているのを聞くのは問題ない」で、あとはすべてAである。30代男性は「感じれない」だけがC「自分は使わないし、人が話しているのを聞くのもいや」という結果である。以上の6人の使用率は高い。最も使用率が低いのは40代女性で、「考えれる」はB、「考えれない」「感じれない」「忘れれる」の3語がCと4語を「自分は使わない」とした。

表2-2を数値化して、まとめたのが表2-3である。Aを5点、Bを3点、Cを1点とし、11語を55点満点で計算した。

表2-2：中学校国語教員 10 人のプライベートにおける使用率（年代別・性別）

A 自分も使う B 自分は使わないが人の使用は許容 C 違和感・不快 D その他

	20 代		30 代		40 代		50 代		60 代	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
①見れる	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
②寝れる	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
③出れる	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
④起きれる	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
⑤食べれない	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
⑥来れる	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
⑦考えれない	A	A	A	A	C	A	A	A	A	B
⑧感じれない	A	A	A	C	C	C	A	A	A	B
⑨忘れれる	A	A	B	A	C	C	B	A	B	C
⑩買ってあげれる	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A
⑪考えれる	A	A	A	A	B	A	A	A	A	B

表2-3：中学校国語教員 10 人のプライベートにおける使用率の数値化  
(年代別・性別の平均値)

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	平均
女性	55	51	41	53	53	50.6
男性	55	51	47	55	45	50.6
平均	55	51	44	54	49	

これによると、男女の平均はともに 50.6 と、「ら抜き言葉」の使用に性差がないことが分かる。また、20 代、50 代、30 代、60 代、40 代の順番で使用率が低くなり、プライベートにおいては、若い人がよく使うという傾向はみられるが、年齢と正比例して「ら抜き言葉」の使用に厳しくなる、というわけでもないことが分かる。

ただし、これはプライベートにおける使用率である。50 代女性はオフィシャルなら全部 B と回答している。60 代女性もこれは実家の母親と方言で話すときの結果であり、オフィシャルでは違うと述べている。オフィシャルでの使用率は、対象者が「ら抜き言葉」をどのようにとらえているかが大きく反映されると思われる。したがって、彼らが日頃「ら抜き言葉」をどのように考えていて、オフィシャルな場面（教育現場）においてどのように使っているか、について見てみよう。



Oct. 2020

遠州方言の「ら抜き言葉」

(2) オフィシャルな場面における使用

表3：「ら抜き言葉」はどのようなものだと考えているか【上段】  
学校で子供たちに対して「ら抜き言葉」を使っているか【下段】

年代	性別	
20代	女性	「見れる・食べれる」は東京語・共通語。「見れん」の「ん」は遠州弁。書き言葉では気を付ける言葉。 授業でも <u>しゃべっている</u> 。
		<u>正しくない言葉</u> だと思う。
	男性	話すときは使っている。直す気はない。直らないだろうし。教壇に立っているときは正しい言葉を使ったほうがいいと思うが。書くときは気を付ける。
30代	女性	一昔前は若者言葉の象徴。 <u>今は多くの人が使っている</u> 。文章では使わないようにしている。 <u>まだ正式な言い方ではない</u> 。
		話すときには使ってしまった。話し言葉では自分でも気が付かない。
	男性	一字少ないから言いやすい。
		授業中は気にしている。教師になりたての頃は全開で使っていたが、先輩教員に注意された。昼休みや放課後は平気で使っている。
40代	女性	文法的にまずい。国語の教師としてまずい。 <u>正しくない</u> 。
		授業中は注意しようとしている。頑張って「ら入り」にしようとしている。
	男性	可能形が省略されたもの。 <u>認知されつつある</u> ので、これもありだと思う。使うのに罪悪感はない。
		授業中も使う。日常的に使っている。原稿を起こしてスピーチするときや改まった方（講師や教育長など外部の方）と話すときは「ら入り」にする。
50代	女性	文法的には「ら」が入っているほうが正しい。本来は「ら入り」が正しい。オフィシャルでは使っていない。長年の教員生活で遠州イントネーションの混じった標準語を話している。ただ、 <u>今はら抜きが主流</u> 。言葉は生き物。
		国語の教員としての自覚はあるので、 <u>気を付けている</u> 。「ら抜き言葉」がわかりにくい子もいるので使わない。
	男性	正式ではないが若い人が使っていて、 <u>今では許容されている</u> 。正式なところでは「ら」を入れる。「ら」が入るのが正式だという認識がある。
		授業中も使っている。子供との普段の会話では使っている。朝礼、スピーチなど正式な場では敬語になるので、自然とら抜き言葉にはならない。
60代	女性	日常会話で親しい間柄では仕方がない。テレビや文章を作るときは正しい日本語でと使い分けをしたほうがいい。公共性があるものは誰でもわかる言葉でなければいけない。
		授業中は気を付けて <u>きちとした言葉</u> で話す。昼休みなどは気を使わないで話す。
	男性	省略された語。 <u>今は正しくない</u> ので直す方向で指導している。 <u>そのうち標準語になるのではないかな</u> 。自分では言わない。
		<u>使わない</u> 。自分では言っていないつもり。大学時代の先輩の教育の成果か？

上段     — : 正しさに言及している箇所     ~~~~ : 許容・諦観が現れている箇所

下段     ..... : 授業中も使っている     ---- : 授業中は気を付けている

10人中7人が「ら抜き言葉」を「正しくない言葉」だと認識している。しかし、一方で「認知されつつある(40代男性)」「今はら抜きが主流(50代女性)」「今では許容されている(50代男性)」「そのうち標準語になるのではないかな(60代男性)」という認識もある。

「正しさ」に触れなかった3人は、「共通語(20代女性)」、「一字少ないから言いやすい(30代男性)」、「認知されつつあるので、これもありだと思う(40代男性)」である。

授業中に使うかという質問に対しては、10人中5人は「気を付けている」が、残る5人は「授業中も話

すときは使っている」。「使っている」のは20代男女, 30代女性, 40代男性, 50代男性である。20代男性は「直す気はない。直らないだろうし」, 30代女性は「話し言葉では自分でも気が付かない」, 40代男性は「使うのに罪悪感はない」という。30代男性が授業中気を付けているのは, 教師になりたての頃に先輩教員に注意されたからであり, 授業以外では「平気で使っている」。30代男性以外に, 授業中に気を付けているのは, 40代女性, 50代女性, 60代男女の4人である。60代男性は気を付けているのではなく, 「使わない, 自分では言わない」であり, その理由を問うと, 「大学時代の先輩の教育の成果ではないか」との回答であった。先輩からは相当厳しく教育されたようだ。40代と50代の女性は「国語の教員としてまずい」「国語の教員としての自覚はあるので, 気を付けている」という言葉を使っている。

先述したとおり, プライベートな場面における使用率が最も低いのは40代女性教員である。彼女は「ら抜き言葉」を「正しくない」と言い切っており, 今は許容されているというような肯定的な言及はなかった。それゆえ, 「意味が混同しない言葉については, 国語教員になって「ら抜き言葉」はダメという意識から「ら」を入れようと心がけた結果, プライベートでも「ら入り言葉」を話すようになった(今回の調査ではプライベートで「ら入り言葉」を使っているのは11語中4語である)」というように自身を律したのであろう。

こうしてみると, 若い世代のほうが「ら抜き言葉」に対して肯定的であり, オフィシャルな場面における使用についても抵抗を感じていないことが分かる。年配の世代は, 「ら抜き言葉」について, 本来は正しくはないが今では許容されているという認識を持つ人は少なくないが, 自分が授業中に使うという人は少なくなる。40代以上の男女を比べると, オフィシャルな場面では女性のほうが「正しさ」に敏感で自らを律する, と言えよう。とはいっても, 10人中5人の国語教員が授業中でも「ら抜き言葉」を使って話すという結果は, 他の地域よりずっと多いのではないだろうか。

次に, 中学校の生徒たちが「ら抜き言葉」をどの程度使っているのか見てみよう。

### 3.1.2 中学生の調査

中学校の生徒が日常生活の中で「ら入り言葉」と「ら抜き言葉」のどちらを使うか調べた結果が表4-1である。表4-2は, 表4-1のうち「両方」使うと回答した人数を「ら入り言葉」を使う, 「ら抜き言葉」を使うと回答した人数にそれぞれ足したものである。

生徒の「見れる」「寝れる」「起きれる」「食べれる」の使用率は9割を超える。教員は100%であるが, 生徒の調査が世論調査と同様に, 「ら抜き言葉」と「ら入り言葉」を対比させ, どちらを使うかと尋ねている点や, 調査対象数が教員10人の30倍近くの294人であるということを考えれば, この結果はかなりの高さだと言える。また, 「世論10代」の「見れる」「食べれる」「考えれる」3語の結果と比較しても高い。世論調査の10代の対象年齢は16～19歳で, 本調査が12歳～15歳の中学生なので, 同じ10代でも年齢の低い本調査のほうが「ら抜き言葉」を使う率が高くなるのかもしれないが, 世論調査の対象者数は84人で本調査は294人と3倍なので本調査のほうが結果が均される可能性が高いことを考えると, この結果は相当高いと言えよう。

生徒の「感じれる」「考えれる」の結果は「ら抜き言葉」と「ら入り言葉」が共に6割前後と拮抗している。「両方使う」と言う人が4人に1人程度いる。「考えれる」だけが, 教員のプライベートにおける使用より生徒の使用の方が低くなっている。「考えられる」という言葉は, レポートなどの改まった書き言葉で使うことが多いため, 普段から「ら」を入れるよう注意されているからなのかもしれない。「忘れれる」は「忘れられる」を使う人が8割弱と多く, まだ乱れの段階の言葉であると言えよう。しかし, 「忘れれる」を使う人も4割を超えている。教員調査でも使う人は4割で, 自分は使わないが許容するという人が3割で, 合わせて7割が許容していることを考えると, 生徒に「自分は使わないが許容するか」という調査をして

表4-1：ふだん「ら入り」と「ら抜き」どちらを使うか

	見れる	寝れる	起きれる	食べれる	感じれる	考えれる	忘れれる
ら入り	19 (6.5)	12 (4.1)	9 (3.1)	14 (4.8)	111 (37.8)	119 (40.5)	164 (55.8)
ら抜き	233 (79.3)	232 (78.9)	237 (80.6)	236 (80.3)	112 (38.1)	101 (34.4)	65 (22.1)
両方	40 (13.6)	45 (15.3)	45 (15.3)	42 (14.3)	68 (23.1)	71 (24.1)	63 (21.4)
その他	2 (0.7)	5 (1.7)	2 (0.7)	2 (0.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	1 (0.3)
無回答	0	0	1 (0.3)	0	2 (0.7)	2 (0.7)	1 (0.3)
計	294	294	294	294	294	294	294

表4-2：「両方使う」を加えた「ら入り」と「ら抜き」の使用率（合計は100を超える）

	見れる	寝れる	起きれる	食べれる	感じれる	考えれる	忘れれる
ら入り	59 (20.1)	57 (19.4)	54 (18.7)	56 (19.0)	179 (60.9)	190 (64.6)	227 (77.2)
ら抜き	273 (92.9)	277 (94.2)	282 (95.9)	278 (94.6)	180 (61.2)	172 (58.5)	128 (43.5)
教員※	100.0	100.0	100.0	100.0	60.0	80.0	40.0
世論※※	48.4	—	—	32.0	—	7.8	—
世論10代 ※※※	83.3	—	—	58.3	—	13.1	—

※「教員」は、表2-1において「ら抜き言葉」を「自分が使う」と回答した使用率である。

※※「世論」は『平成27年度 国語に関する世論調査』の全体の結果である。

※※※「世論10代」は上述の調査における、16～19歳の「ら抜き言葉」を使う、「両方使う」を合わせた結果である。16～19歳の調査対象者数は男女合わせて84人である。

いたら、教員と同じように3割程度の結果が出る可能性は高い。

以上、中学校の国語教員と中学生の調査結果を数値の上で見ると、教員と生徒の「ら抜き言葉」の使用率に大きな差はなく、世論調査の10代の結果と比較してもかなり高い使用率であることが分かる。いずれにしても、生徒の調査結果からも教員の調査結果からも、遠州地方においては現在でも「ら抜き言葉」は方言である、と言えよう。

### 3.2 「ら抜き言葉」が方言であるという認識の有無

#### 3.2.1 教員インタビュー結果

「ら抜き言葉」が方言だと知っている教員は10人中1人もいなかった。「え？遠州弁なんですか」「言われてみれば、方言の中に「ら」はないかも…」という反応であった。30代男性教員は「標準語ではないので、方言かもしれないと思ったが、確たる認識はなかった」と話している。

20代女性教員は、「見れる、食べれるは共通語」だと思っていたそうである。「若者言葉」だとする人も2人いた。10人中7人は「正しくない言葉」という認識であるが、今では話し言葉においては許容されているとしている。「日常会話で親しい間柄では仕方ない(60代女性)」という意見は、自分も含め多くの人が日常会話で使用しているのでもう止められないという意識から来るのだろう。しかし、「自分の周りの多くの人が日常会話で使用している」のは方言だからだ、という認識はない。

## 3.2.2 中学生アンケート結果

表5：ふだん自分が方言（遠州弁）を使っていると思うか

方言使う	方言使わない	わからない	その他	無回答	計
185 (62.9)	20 (6.8)	79 (26.9)	7 (2.4)	3 (1.0)	294

「遠州方言を使う」と自覚している生徒は6割を超える。多くが「だら」「だに」「どすごい」「だもんで」等を使うから、と理由を書いている。自分が遠州方言を使っているかどうか「わからない」と、自分の話す言葉を客観視できない生徒が4分の1以上いる。また、「遠州方言は使わない」という生徒も20人いるが、「他地域から来てまだ数年しか住んでいないので遠州方言は話せない」という生徒が3人、「使おうと思わない」という意志を持っている生徒が1人であり、残る16人の生徒は「みんなが使っているから方言だと思っていない」「自分の話している言葉が当たり前すぎて方言だと思っていない」という理由である。中には「これが標準語だと思っている」と書いている生徒も2人いた。したがって、「使わない」と回答しているうち、その多くは実は「使っている」と推察できる。

表6-1：「見れる」「食べれる」はどんな言葉だと思うか【全学年の結果】

標準語	方言	若者言葉	わからない	その他	無回答	計
134 (45.6)	32 (10.9)	22 (7.5)	90 (30.6)	6 (1.9)	10 (3.4)	294

調査時に文法の可能形が既習の生徒は3年生だけであるので、表6-1から3年生だけを取り出した結果を表6-2にまとめる。

表6-2：「見れる」「食べれる」はどんな言葉だと思うか【3年生の結果】

標準語	方言	若者言葉	わからない	その他	無回答	計
38 (38.4)	13 (13.1)	10 (10.1)	34 (34.3)	0	4 (4.0)	99

「ら抜き言葉」を「方言」だと回答している生徒は全学年でも3年生だけでも1割強しかいない。「ら抜き言葉」を「方言」だと回答した32人（全学年）の理由を見てみると、「(テレビ、親せき、本を通して)遠州地方以外の人が使っていない(ことに気が付いた)から」6人、「なんとなく」5人、「親から聞いた」「先生から聞いた」各4人、「自分が使わないから(遠州方言だ)」2人、「県外の人に変だと言われたから」、「テレビで方言だと知ったから」「本で方言だと読んだから」「小6のとき総合の授業で調べたから」各1人という回答である<sup>3)</sup>。テレビや他地域の人等、他との接触で気がつく生徒が多く、教員から聞いたり授業で調べたりと学校教育の場で学んだ生徒は294人中5人(1.7%)である。この結果からも、方言だと知っていて教えている教員は少ないことが分かる。

最も多かったのは、「ら抜き言葉」を「標準語<sup>4)</sup>」とする生徒である。文法を学習した3年生では7ポイントほど減ってはいるものの、それでも4割近くに上る。共通語だと思っていたという20代女性教員(表3)も、子どものころからそう思い続けていたのかもしれない。自らもふだんから使い、テレビなどでも多くの人が使用しているので、他との接触等で気がつく機会がなかったら、話し言葉においては「標準語」だと思うのだろうか。

以上をまとめると次のようになる。生徒たちは日常的に「ら抜き言葉」を使っており、自分たちが遠州方言を話しているという自覚もある。しかし、「ら抜き言葉」が方言だとは認識していない。方言だということを学校教育の場で学んだ生徒は294名中5名と非常に少ない。4割を超える生徒が「ら抜き言葉」

は「標準語」だと思っている。

教員と生徒の調査結果から、教員は全員、生徒は9割程度が「ら抜き言葉」が「方言」だと認識していないことが分かる。

### 3.3 「ら抜き言葉」の国語教育における扱い

#### 3.3.1 教員インタビュー結果

表7-1：中学校国語教員が「ら抜き言葉」をどのように教えているか

20代女性	話し言葉では注意しない。書き言葉では注意する。「話し言葉と書き言葉」という中学1年の単元で教えている。
20代男性	話し言葉ではスピーチでも直さない。書き言葉では×にして「ら」がないと駄目だよ、と教える。文法で説明するのではなく、単語レベルで説明する。
30代女性	話し言葉では使ってもいいと教える。作文や日記など書き言葉では「ら」を入れるよと赤で付け足す。「話し言葉と書き言葉」という単元で話し言葉から書き言葉に書き直しをさせる際に「ら抜き言葉」も練習に入れる。
30代男性	話し言葉では注意しない。発表やスピーチでは気が付けば注意するが、気が付かないことも多いと思う。書くときは訂正する。文法の説明はしない。
40代女性	スピーチでも話し言葉では注意しない。3年生の面接指導では言うかもしれない。作文は指導している。活用表でざらりと説明する。そのときに、本当は「見れる」じゃなくて「見られる」だよと説明する。
40代男性	スピーチでも話し言葉では注意しない。作文、テスト等に行っていると添削し、減点する。正しい形は示すべきだと思う。文法は活用表を用いて説明する。その際、君たちが使っているのは「ら抜き言葉」だと伝える。
50代女性	会話では直さない。スピーチでは気が付けば直す。作文のときは「ら」が入ると言う。文法は活用表で説明する。
50代男性	正式な場では「ら」を入れる。作文、レポート、スピーチ原稿などは添削する。『文法の学習』という副教材を使って教える。子供だから許されるけど大人になったときや公式の場では「ら」を入れよう。
60代女性	話し言葉でも「ら抜き言葉」で話したら、「本当はどうなの？」と聞き、「あ、食べられるです」と答える、というような会話をして注意を促す。公私の区別は面接につながる。正しい文法では「ら」が入るので、書き言葉では「ら」が入ると言う。文法は事細かには教えない。3年間でだんだん分かるようになればいい。
60代男性	話しことばでは面接指導で直す。作文では直す。文法では、活用と接続の形のみを入れる。「ら抜き言葉」については取り立てて説明しない。

まず、教員は10人とも「ら抜き言葉」が方言だと認識していないため、方言教育において「ら抜き言葉」を扱う人はいなかったことを記しておく。

次に、「ら抜き言葉」を文法教育で言及する人は40代、50代の教員である。活用表などで形を入れる際に、「君たちが使っているのはら抜き言葉だよ」という感じで指摘するそうである。文法教育では説明しない人(30代男性、60代男性)や文法というより単語レベルで説明する人(20代男性、60代女性)もいる。「話し言葉と書き言葉」という単元で「ら抜き言葉」についても教えるという人(20代女性、30代女性)もいる。

全員が「ら抜き言葉」を指導しているのは、文法教育ではなく、作文教育である。

話し言葉と書き言葉における指導は、年齢により傾向が異なる。20代～40代はスピーチといった改まった場面の話し言葉でも「直さない」。逆に、書き言葉では日記でも直すという人(30代女性)もいる。話し言葉では「ら抜き言葉」はOKだが、書き言葉では「ら抜き言葉」はダメというように、話し言葉と書き言葉の対比で考えているように思われる。しかし、50代以上になると、スピーチ指導や面接指導などでは話し言葉においても直している。「正式な場」「公私の区別」という視点を話し言葉の中に加味してい



るのは50代男性と60代女性である。

表7-2：「ら抜き言葉」を注意したときの生徒の反応

20代女性	作文で「ら抜き言葉」を書いてきたら赤で「ら」を入れるが、生徒は「なんですか」とは聞かない。
20代男性	「どうしてダメなのか」という質問はない。「ら」を入れると言にくい」とは言っているが、「仕方がない、そういうものだ」と思っている様子である。
30代女性	生徒は素直。「へえ、そうなんだ」と受け入れている。本当は違和感があると思うが、納得した振りをしているのではないかと。「先生も使っているよね」と言われることがあるが、話し言葉ではいいんだと説明する。説明があいまいで自分自身で納得できないところがある。
30代男性	「ら抜き言葉」が違うということはどこかで知っているようだ。
40代女性	「ら抜き言葉」は小学校でやっているのか知っている。「ふーん、めんどくさい」という反応だが、指摘されたときは「気をつけなきゃ」。
40代男性	生徒は「ら抜き言葉」が間違っているということを認識しているが、広く使われているからいいじゃないと思っている。書き言葉、テスト、入試等の際は減点されるものだと思っている。一度注意すると、自分で直すし、間違っただけに指摘すると「しまった」という感じになる。
50代女性	普段使っている生徒は、「なぜ駄目なのかかわからない」と言う。テスト問題は彼らが迷わない問題にしている。つまり、「ら抜き言葉」は出さない。
50代男性	「あ、そうなんだ。大人になったり公式の場だったりすると「ら」を入れるんだ。気を付けよう」という感じである。
60代女性	「日常使っている言葉が違うの？」と聞く生徒がいる。「違わないよ、それは会話。公共の場ではちゃんと話して。面接につながるから」と答える。テストに出すのはかわいそうなので出さない。
60代男性	作文では「ら抜き言葉」が減点対象となっていることについて、納得のいかない生徒がいる。今は認められていないから現状ではダメだと言う。

ほとんどの教員が生徒は素直に従っていると思っているが、その裏側の不満も感じ取っているようである。「なぜ駄目なのかかわからない」「日常使っている言葉が違うの？」と教員に直接質問を投げかける生徒も少ないがらいるようだ。教員は「今は認められていないからダメ」「会話で使うのは違わないよ。でも、公式の場ではちゃんと話して」などと回答している。しかし、自分の説明（「今はダメだよ」「書き言葉ではダメだよ」等）の根拠があいまいなので自分自身があまり納得できていないと言う人もいた。また、生徒が混乱するので、テストには出さないという教員が2名いた。

では、授業を受ける生徒たちはどのように習ったと受け止めているか、見てみよう。

### 3.3.2 中学生アンケート結果

表8-1：国語の授業で習った形【全学年の結果】

見られる	見れる	どちらでもいい	覚えていない	教わっていない	その他	無回答	計
33 (11.2)	29 (9.9)	20 (6.8)	150 (51.0)	54 (18.4)	0	8 (2.7)	294

調査時に文法の可能形を習っている生徒は3年生だけなので、表8-1から3年生だけを取り出した結果を表8-2にまとめる。

表8-2：国語の授業で習った形【3年生の結果】

見られる	見れる	どちらでもいい	覚えていない	教わっていない	その他	無回答	計
16 (16.2)	11 (11.1)	12 (12.1)	55 (55.6)	3 (3.0)	0	2 (2.0)	99



中学生アンケート（資料3）の「Ⅲ. 国語の授業では「見ることができる」という意味を表す言い方はどのように習いましたか」という質問に対し、「①見られる」「②見れる」「③①でも②でもどちらでもいい」「④覚えていない」「⑤教わっていない」「⑥その他（ ）」で回答してもらった。

「見られる」と教わったと回答しているのは11%強、3年生で16%強に上がるが、5人に1人もいないことに驚いた。「見れる」と教わったと回答している生徒は1割弱、3年生で1割強となる。「見られる」と「見れる」の間に大きな差がない点が興味深い。「どちらでもいい」と教わったと回答している生徒は3年生で12%おり、全学年の倍近くに増えている。これは、推測するに、「話し言葉ではOKだが、書き言葉ではダメだよ」と教わっていることを、生徒なりに表現すると「どちらでもいい」ということになるのかもしれない。助動詞は中学2年生の2月くらいに学習するので、本調査は3年生にとって学習してから約10か月後に行ったこととなる。そのためか、「覚えていない」が半数を超えたが、さすがに「教わっていない」は全学年に比べると減っている。教わったことは教わったがどのように教わったかは覚えていない、ということなのであろう。

表6-1、6-2で「ら抜き言葉」を標準語だと思っている生徒が半数近く（3年生でも4割近く）いることを示したが、これは、国語の授業で正しい形が「ら入り言葉」だと習ったと回答している生徒が1割強（3年生でも16.2%）に過ぎないということと連動しているのではないだろうか。中学校国語教員の調査（表7-1）では、ほとんどの教員は作文では「ら入り言葉」を使うと教えているとするが、文法的に正しい形は「ら入り言葉」だということは伝わっていないようだ。

多くの生徒は、授業で教わる、文法的に正しい言葉が「ら入り言葉」だということを理解していない、と言える。

#### 4. おわりに

本稿は、「ら抜き言葉」が方言である遠州地方の学校現場における調査を通して、以下のことを明らかにした。

1. 「ら抜き言葉」は遠州地方の中学校の国語教員と中学生にどの程度使われているか。

現在でも遠州地方の方言と言えるのか。

➡中学校の国語教員はプライベートにおいては10人全員が「見れる」「寝れる」「出れる」「起きれる」「食べれる」「来れる」を使う。「買ってあげれる」は9人、「考えれる・考えれない」はどちらも8人、「感じれる」6人、「忘れれる」は4人が使う、という結果になった。オフィシャルな場面である授業においても半数が「ら抜き言葉」を使うと回答している。

中学生（294人）も「見れる」「寝れる」「起きれる」「食べれる」の使用率は9割を超える。

「感じれる」「考えれる」は61.2%と58.5%と6割前後である。「忘れれる」も43.5%の人が使うと回答している。これは世論調査の10代の結果と比べてもかなり高い数値である。

➡以上の結果から、現在でも遠州地方の方言だと言える、と結論付けられる。また、日本の大多数の人が「ら抜き言葉」を使わない単語でも多くの人が「ら抜き言葉」にしていることが分かる。

2. 「ら抜き言葉」は遠州地方の中学校の国語教員と中学生に方言として認識されているか。

➡中学校の国語教員は10人とも方言だと認識していなかった。

中学生（294人）は「標準語」45.6%、「方言」10.9%、「若者言葉」7.5%、「わからない」30.6%と、「ら抜き

言葉」を「標準語」だと思ふ中学生が半数近くいる、という結果となった。「方言」と回答した32人のうち、教育現場でその知識を得たのは5人のみである。

双方の結果から、遠州地方の中学校の国語教員と中学生に「ら抜き言葉」は「方言」だという認識はほとんどない、と言える。

### 3. 「ら抜き言葉」は中学校の文法教育と方言教育でどのように教えられているか。

中学生はどのように受け止めているのか。

➡2で「ら抜き言葉」は「方言」だという認識が調査対象の国語教員にはなかったのも、方言教育で「ら抜き言葉」を取り上げる人はいなかった。

文法教育においては、活用表で説明をする人が多いが、注意を払って指導を行うのは、「書き言葉」(作文教育)においてであり、「話し言葉」においては改まった場面においても多くの教員は指導の対象としていない。

➡生徒は反論することもなく、注意されると気を付けようとする姿勢を見せている、と教員は回答しているが、中には「どうしてダメなのか」と納得しない生徒もいるようである。

当の中学生の回答では、授業で教わった形は「見られる」「見れる」「どちらでもいい」が10%台で拮抗し、「覚えていない」が半数を超える。「見られる」という「ら入り言葉」が文法的には正しいという受け止め方をしている生徒はかなり少ないことが分かる。

以上のことから、遠州地方の教育現場においては、「ら抜き言葉」は日常的に多用され、現在でも方言の座を守っていると言えるが、「方言」だと認識する人はほとんどいない、ということが分かった。教員は、話し言葉では「ら抜き言葉」を自らも使い、生徒に対しては話し言葉における使用は注意せず、書き言葉においてのみ指導する人が多い。また、中学生は、「ら入り言葉」が文法的に正しいと認識する人は1割強しかおらず、半数近くは「標準語」だと認識している、ということも見てきた。

今後「ら抜き言葉」は標準語になるだろうと予見する教員もいたように、先述のとおり、研究者の間でも五段活用動詞に可能動詞ができたように、長い時間をかけて「ら抜き言葉」が一段活用動詞やカ変活用動詞の可能動詞になっていくと言われている。明治時代にすでに可能の意味を弁別するために「ら抜き言葉」を使っていた遠州地方は、現時点においても「ら抜き言葉」を多用しており、それどころか、「ら抜き言葉」を標準語だと認識している中学生が半数近くいる、という状況である。これは、将来の日本の姿を一足早く具現化しているのではないだろうか。「ら抜き言葉」において遠州地方は変化の最先端を行っている、と言えるのかもしれない。

### 謝 辞

お忙しい中、インタビュー調査やアンケート調査に時間を割いてくださった中学校の国語の先生方、アンケートに真摯に回答してくださった生徒の皆さん、そして本調査が実施できるようコーディネートをしてくださった方々に心から御礼申し上げます。

### 注

- 1) 文化審議会国語分科会は2020年3月時点で見える限り、第63回(2017年2月27日開催)を最後に「ら抜き言葉」については言及していない。第63回では、この世論調査の結果を受けた議論があったが、教育に及ぼすことまでは考えていないとしている。
- 2) 『土のいろ』では、四段活用動詞(現在の五段活用動詞)にも可能動詞「歩ける」の隣に「歩かれる」と、いわゆる「れれ足す言葉」が併記されている。また、否定形「歩けない」はほとんど用いられず、「歩けれん」となるという。中には「歩

Oct. 2020

遠州方言の「ら抜き言葉」

けれれん」とさらに「れ」が足される地方もあるそうだ。

- 3) 32人が「方言」と回答しているが、理由は25人分しか挙げていない。残る7人の内訳は、書いている内容が意味不明2人、「わからない」2人、記述なし3人である。
- 4) この選択肢は「標準語」とするか「共通語」とするかで迷ったが、中学生の調査を実施した中学校で国語教員と話した際に、共通語ではなく標準語を使う教員が多かったため、「標準語」にした。

#### 参考資料

井上史雄 (1998)『日本語ウォッチング』岩波新書

飯尾哲爾編 (1932)『土のいろ 第九卷第三号 通巻第五十冊 遠州方言研究号 第二輯』土のいろ社

文化庁文化庁国語課 (2015)『平成27年度 国語に関する世論調査〔平成28年2月調査〕』ぎょうせい

松下大三郎 (1897)『新訂日本俗語文典 付遠江文典』(北原保雄・古田東朔編) (1997) 勉誠社

WEB資料

最終確認日【2020年3月28日】

第20期国語審議会 (1995) 新しい時代に応じた国語施策について (審議経過報告)

[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/09.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/09.html)

第63回文化審議会国語分科会議事録

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo\\_63/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_63/index.html)

毎日新聞 毎日 news パック

[https://mainichi.jp/contents/edu/01\\_notice.html](https://mainichi.jp/contents/edu/01_notice.html)

(2020年7月3日掲載決定)

